

実践報告

初年次教育としての役割を持った「スポーツ実技」授業実践  
— 大学生として、能動的に学ぶ姿勢を作るために —

高村 秀史

日本福祉大学 全学教育センター

I Implemented Lessons in "Sports Practice" as Part of the First Year's Education  
- In Order to Create an Attitude of Active Learning in University Students -

Shuushi TAKAMURA

Inter-departmental Educational Center, Nihon Fukushi University

Keywords : 大学生の生徒化, 大学の学校化, 能動的学習, ICT 活用, 学生指導

要旨 :

最近、「大学の学校化」、大学生の「生徒化」という言葉をよく耳にする。筆者が担当するスポーツ実技を履修する1年生の動向を観察すると、「授業出席率が高く、まじめで、言うことをよく聞く学生」が多い。しかしその反面、「自ら能動的に学ぶ姿勢、意欲、意識が低く、指示がなければ動けない学生が増えている」という実感がある。高校教員の経歴を持つ筆者は、この傾向を「高校生」の学習スタイルに近いものと感じ、「まだ学生化できていない生徒」と捉えた。このような学生に対し、高校時代の「体育」と、大学での「スポーツ授業」の学びのプロセスの違いを実感することが「大学生として学ぶ姿勢、技術」を身につけさせ、「生徒の学生化」のために有用であると筆者は考えた。そのためにアクティブラーニング、反転授業、グループ学習、ICT (Information and Communication Technology) 活用など、様々な学習手法を使って授業を展開した。本稿では実際に展開した実践の報告とともに、得られた知見を報告する。

1. はじめに

筆者は日本福祉大学 (以下、本学) で1年生の「スポーツ実技」を担当している。スポーツ実技を担当する教員の間で「最近の学生はまじめ」「まじめだけど行動が伴わない」「受け身の学生が多い」といった話題がよく出る。この傾向は本学だけに言えることではない。武内は、とくにここ10数年の間にどの大学でも、授業出席率はたしかに高まっている。その反面、「高校と同じように、授業では出席がとられ、教師の指示にしたがって将来に

役立つ内容が教えられるべき、と感じている」、「大学教師に従順な大学生が増えている」(武内清, 2014, 2010)と指摘しており、全国的な傾向であると推察できる。

この傾向について、筆者が高等学校教員として「体育実技」を担当していた時を振り返ってみる。高校での「体育実技」は1種目につき8~12時間で基礎、応用、実践、試合を指導するのが一般的であった。少ない時間数で1種目の基礎から試合までを完結させるためには、「生徒に考えさせる」というプロセスに多くの時間を割

くことは非常に困難であった。授業進行の傾向として「運動が苦手な生徒」はあまり目立つことがなく、「運動能力が高い、運動が好きな生徒」が中心になって授業が進むことが通常であった。結果的に「運動能力が高い、運動が好きな生徒」には良い成績がつく場合が多数であった。

これらの事例の善悪は別として、高等学校における教育では、3年間という短い時間の中で生徒により多くの学びを習得させるために、生徒の自主性より、教員による管理を重視する必要がある。結果的に「教員が将来に役立つ内容を教えてくれる」という受け身の姿勢が育つことが推察される。

その後、筆者はアメリカンフットボール部の監督として本学に勤務することとなったが、当時の4年生と懇談した際、「大学生とはこんなにしっかりした考えを持ち、自主的に行動するのか」と感心した覚えがある。約5年間、監督として指導を行ったが、年を追うごとに4年生はもちろん、部全体の「受け身」「指導者依存」姿勢が強くなっていく傾向を感じた。これは、監督である筆者自身が高校教員としての指導法から脱却できず、「学生に与えすぎてしまった」ことが原因であると推察する。つまり、筆者自身が学生に対し手厚く指導しすぎたため「大学生の生徒化」が起こってしまった事例である。

「スポーツ実技」を履修する学生は1年生である。高校卒業後すぐであるため、当然のごとく「高校生気分」が抜けておらず、まさしく「生徒」の状態である。筆者の所属する全学教育センターは、学部を越えて、本学学生が身につけるべき力をつけることを教育目標としている。つまり「生徒の学生化」を担う部署でもある。そこで自らが経験した「学生の生徒化」事例と、これまでの教育実践を活かし、「スポーツ実技」のプログラムで「生徒の学生化」を志すに至り、実践を行った。

## 2. 目的

大学生の学びに必要な「学習方法」「能動的に学ぶ姿勢」「コミュニケーション力」などを経験的に学習し、身につけることで「生徒の学生化」を図ることを目的とする。まず、「学習手法は目的ではなく、あくまでも手段である」と考え、それぞれの学習手法に高い結果をもとめるのではなく、経験させてみるという視点を持って臨んだ。次に「失敗は成功のもと」と考えた。この場合の失敗とは、大学での学びに際し、自分に不足している

表1. 「生徒の学生化」到達目標と方法

1. 大学生としての学びに必要な技術の取得
<ul style="list-style-type: none"> <li>・パソコンの基礎的な使い方（文章作成、プレゼンテーション資料、学習記録）.</li> <li>・ネットワークを使った学習方法の経験.</li> <li>・文章作成（レポート、学習記録）やスライド（作成、プレゼンテーション）などの経験と必要性理解.</li> <li>・他者観察、評価. ビアレビュー.</li> </ul>
2. 大学生としての学びに必要な意識の取得
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自主性をもって能動的に学習する姿勢の取得.</li> <li>・受け身の姿勢からの脱却</li> </ul>

意識や技術を知ることによって必要性を感じ、成長するであろうという意味である。この2点の考え方を念頭に「生徒の学生化」を図るため、様々な学習手法を用いた。

具体的な到達目標は2点ある（表1）。1点目は「1. 大学生としての学びに必要な技術の取得」である。パソコンやネットワークの使い方やレポート、学習記録の作成などの技術を経験し、必要性を知ること最終的な目的として、本学が提供する Google Apps などの ICT サービスや、iPad、各自のスマートフォンを活用し授業を行った。2点目は「2. 大学生としての学びに必要な意識の取得」である。能動的に学習する姿勢や必要性を経験的に知ることを目的として、グループ学習におけるアクティブラーニングやディスカッション、スマートフォンや iPad での振り返り学習や他者指導、反転学習などの手法を用いた。

## 3. 本学におけるスポーツ授業の考え方

本学では早くから「大学体育は小・中・高での学びの上に位置づく教育である」と捉え、「レクリエーション的な内容になっていないか」「高校体育以上の水準の内容が提供されているか」という議論が繰り返し行われていた。その到達点として「20歳の学力」（表2）が設定された。「20歳の学力」の内容は「1. 得意なスポーツ種目を一つは持っている」として、1年間で1種目を学

表2. 設定された「20歳の学力」

1. 得意なスポーツ種目を一つは持っている
2. そのスポーツの初心者指導ができる
<ul style="list-style-type: none"> <li>・15時間の指導計画をつくらることができる.</li> <li>・初歩のゲームの審判ができる.</li> <li>・クラブ運営（部活動）の指導ができる.</li> </ul>
3. 「スポーツと社会」について社会科学的認識を持っている
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スポーツ振興法やユネスコ「体育</li> <li>・スポーツ国際憲章」を学んでいる.</li> <li>・スポーツの発展史やスポーツ行財政などについての基礎的知識を持っている.</li> </ul>

ぶことにより、得意と言えるまでの知識、理解、技術の向上を図るものである。「2. そのスポーツの初心者指導ができる」は「1.」で身につけた得意種目の知識力、理解力、技術力を、他者に対して指導ができるレベルにまで向上させることを図るものである。「3. 「スポーツと社会」について社会科学的認識をもっている」は実技と理論のつながりや、スポーツと社会とのつながり理解を図るものである。「半期開講」「複数種目のオムニバス」という授業計画では、これらの学びを得ることは困難であるとの考えのもと、「通年開講」「通年1種目」という内容で授業を展開している<sup>1)</sup>。「生徒の学生化」を目指す授業プログラムを作成・実践するためには、上記のような本学のスポーツ授業に対する考え方、授業体系が不可欠であった。

#### 4. 対象と方法

##### 4.1 実践対象講義

本稿では、美浜キャンパスにおいて1年次に開講されているアーチェリーの授業と、東海キャンパスにおいて1年次に開講されている卓球、バドミントンの授業での実践を報告する(表3)。

##### 4.1.1 アーチェリー履修生の特徴

履修生に対し、第1回目の授業でアンケート調査を行った(n=162)。高校時代に体育の授業以外で週1回以上スポーツに関連する部活動や校外活動に参加していた履

表3. 対象授業

種目	アーチェリー(美浜キャンパス)
開講	2013年度~2017年度4月~1月
授業数	90分×30コマ, 2単位
開講日	金曜日2限 11時~12時30分 金曜日3限 13時25分~14時55分
対象者	2限: 子ども発達学部子ども発達学科(2017年よりスポーツ科学部と合同開講) 3限: 子ども発達学部心理臨床学科と社会福祉学部の合同開講
種目	卓球(東海キャンパス)
開講	2015年度4月~1月
授業数	90分×30コマ, 2単位
開講日	火曜日1限 9時20分~10時50分
対象者	経済学部
種目	バドミントン(東海キャンパス)
開講	2015年度4月~1月
授業数	90分×30コマ, 2単位
開講日	火曜日2限 11時~12時30分
対象者	経済学部

修生は64%であった。スポーツ活動に参加していた履修生は、年を追うごとに増える傾向にあった。「スポーツ授業は好きですか」という質問に対しては19%の履修生が、「どちらかといえば好きではない」もしくは「嫌い」と回答していた。ネガティブな意見を持つ理由で一番多かったのは「いい成績をとったことがない」であった。

一般的に「体育」の授業では、スポーツ・運動の得意、不得意により、授業に対する積極性が異なる(佐藤ほか2013)との報告がある。本学のスポーツ授業では、運動能力や実技の得手不得手だけでなく、練習計画の立案、グループ活動など、実技が苦手でも活躍し、良い成績をとるチャンスがある。スポーツ実技にネガティブな意見を持つ履修生であっても、明るく快活な履修生が多い傾向があり、力を発揮する場があれば「学生化」は進みやすいのではないかとこの仮説をもって実践に臨んだ。

##### 4.1.2 卓球、バドミントン履修生の特徴

履修生に対し、第1回目の授業でアンケート調査を行った(n=44)。高校時代に体育の授業以外で週1回以上スポーツに関する部活動や校外活動に参加していた履修生は62%であった。「スポーツ授業は好きですか」という質問に対しては80%の履修生が、「どちらかといえば好き」もしくは「好き」と回答していた。スポーツ活動に参加していた履修生は、バドミントンに多い傾向があった。卓球では、自由記述欄に「厳しい部活で運動してきた」という趣旨の回答をする履修生が多かった。私見ではあるが、まじめな履修生が多く、指示をされれば素直に従い行動するが、自分から積極的に行動する傾向は低く、「指導者の指示で動くことが多く主体的に動くのが苦手」な履修生が多いことが推察された。

##### 4.2 学内環境の利用

本実践ではICTを多く活用した。使用機器は、履修生各自のスマートフォンと学内のパソコン、必要に応じて履修生各自のパソコンも利用した。2015年度にスポーツ授業用として東海キャンパスに10台、美浜キャンパスに8台のiPadを購入し、授業時に利用できるよう整備された以降はiPadも積極的に利用した。大学から付与されているメールアドレス(Gmail)は、情報教育で履修生各自のスマートフォンと連携されている。本学が提供しているGoogle Appsは大学で付与されたアカウントでのみ利用可能であり、学外者は利用することは

きない。また、2015年に開設した東海キャンパスにはALL (Active Learning Laboratory) が設置された。アクティブラーニングようにデザインされた教室環境でグループ学習利用することができた。

## 5. 実践

スポーツ実技の授業内に「生徒の学生化」を目的として取り入れた実践は、2013年度から開始され現在(2017年度)に至る。個々の実践は、対象となる履修生を観察しながら毎年加減されているため、年度によって実施されなかったものや、手法を変更したものも存在する。本稿では2014年から2017年に実施されたプログラムの中から、有用と思われるものを報告する。

### 5.1 各自のスマートフォン、iPadを活用した学習

2014年に行った履修生に対するアンケート結果でスマートフォンを所持している学生が100%であったことから、履修生各自のスマートフォンとiPadを利用した記録や振り返り学習を推進した。スマートフォンの使用方法としては以下のとおりである。

#### 5.1.1 メールでの授業内容連絡<sup>2)</sup>。

メーリングリスト(以下、ML)を作成し、履修生に対して授業の場所、内容、注意事項等を配信した。

#### 5.1.2 カメラ機能を使った画像の記録。

高等教育において、記録を残すことは学習の重要なプロセスである。記録を残す癖をつけることは、その後の学習に役立つと考えた。また、スポーツ技術の獲得にお

いて、自己の動作映像を見ることは極めて有効と考えられる(村山ほか2007)との報告もあり、スマートフォンのカメラ機能を利用し記録を残した。動作映像はスマートフォンのデータ容量を圧迫することから、iPad導入以降、iPadで記録し、学内ネットワークを利用しGoogle Driveで共有した<sup>3)</sup>。記録した画像や動作映像は学習記録の作成や、授業前、中の事前学習、振り返り学習、ピアレビュー、などに活用した(図1、図2)。

### 5.2 You Tubeを使った反転学習

バドミントンや卓球のラケットグリップの持ち方や、アーチェリーのアンカーリング等の技術を短い動画を作成し視聴させた。URL(uniform resource locator)をMLで送付し、事前学習を行った。グループごとに別の課題映像を視聴し、グループ内でまとめて授業内で他者への指導を行った(図3)。You Tubeは大学付与のアカウントと紐つけてあり、URLを知っている学生のみが視聴できるようにした。

### 5.3 紙ベースでの記録、他者評価と学習記録の作成

他者を観察し、評価をすることも学習において重要なプロセスと考えた。紙ベースの「関連チェック表」を作成し、授業時にグループごとで他者観察・評価を行った。「関連チェック表」は学習記録の作成での利用や、振り返り学習などに使用した。

### 5.4 グループ学習

グループ内の他者を継続して観察、評価することが重要と考え、グループを作成した。グループベースで学習



図1. スマートフォンを使った画像、動作映像の記録



図2. 自主的にピアレビューを行う学生も多い



図3. 反転学習とグループ学習で他者への指導を行う



図4. PCを使った学習記録の作成とグループ学習



図5. プレゼンテーション

記録のピアレビューや反転学習を行った。また、グループで課題を設定し、Google Appsのスライド<sup>4)</sup>の作成とプレゼンテーションを行った(図4, 図5)。

## 6. 結果と考察

履修生に対するアンケートは第1回と最終回に行っている。また、追跡調査として、2年生と3年生にもアンケートを行っている。アンケートは5択のリッカート形式と、自由記述形式である。本稿では、自由記述形式でのアンケート結果を中心に考察する。リッカート形式でのアンケート結果に関しては、別の機会でも報告したい。

### 6.1 各自のスマートフォン、iPadを活用した学習

MLを利用しての情報提供は、自らが履修科目を選択する高等教育において、出席は各自の責任であり「与えすぎ」という指摘もあった。しかし、学生に対するアン

ケートでは「あまり必要ない」「必要ない」と回答した履修生は0%であった。履修生の6割程度が一人暮らしの学生であり、生活のリズムが整っていない1年生には授業情報は有用であったと推察される。

画像の記録、利用に関しては、「写真を残すと学習記録がわかりやすくなる」「言葉で説明されるよりわかりやすい」といった記述が多く、おおむね好評であった。実践期間を通じて、どの種目においても、前期期間は指示があったときのみ画像の確認をおこなっていた。アーチェリーの学生の中に、後期に入ると授業前に画像を確認する者、授業中に画像を見ながら相互でコメントをする姿が散見されたのは、想定以上の効果であった。

動作映像に関しては、スマートフォンで記録したものは「見にくい」という記述が散見されたものの、iPadで撮影し、動作解析アプリ<sup>5)</sup>での教員による解説や、グループ内でピアレビューをするようになってからは「すごくわかりやすい」「自分の中の動きのイメージとの違いがよくわかった」といった記述が多く、好評であった(図6)。

### 6.2 You Tubeを使った反転学習

視聴率は高かった。まじめで指示には従う傾向があるためと推察される。事前に授業ですべきことがわかっているためか、提供した動画に加え、自らネットで学習してきた履修生も散見された。グループ内でまとめたの他者指導では、運動能力的には劣る履修生がリーダーとなって活動する姿も散見された。しかし、人任せにする履修生も多くみられた。このような学生にどう参画させるかが課題である。



図6. iPad アプリを使用した動作解析

### 6.3 紙ベースでの記録，他者評価と学習記録の作成

当初，ICT 利用へのこだわりと，紛失，忘れ物への警戒心から，紙ベースでの記録は行わなかった．実際に画像や動作映像を記録するにはスマートフォンや iPad が便利である．しかし，直感的に感想や記録を残すためには，紙ベースを利用するのが便利であると感じた．「関連チェック」とすることで，適当な文章では伝わらないことを理解したとみられ，簡潔にわかりやすく表現しようという努力をする履修生も散見された．しかし，「すごくよかった」「うまかった」など，参考にならない感想を書き続ける履修生も若干名存在する．このような履修生にどう対処するかが課題である．

### 6.4 グループ学習

「同じ人をつづけて観察するので，だんだん意見が言いやすくなった」「苦手なこともみんなて助け合えるのでよかった」という内容が多く，グループでの学習はおおむね好評であった．しかし，人選によっては「もりあがらない」「いつも発言する人が一緒」といった意見も散見され，グループ作成の難しさを感じる．グループ分けは，その方法に関して教員間でも何度も議論が行われ

ている．例えば，後期にグループの再編を行ったところ，「後期のグループは話す人がいなくてつまらない」という理由でドロップアウトをした学生がいた．現在はグループを作成する前に学生を観察し，ある程度教員の思惑が反映されるようにグループ分けを行っている．また，私見ではあるが全体的にコミュニケーション力の低さを感じる．このため，グループ作成直後はゲームなどを取り入れ，コミュニケーションが活性化するように配慮した．

## 7. 今後の課題とまとめ

本稿では「生徒の学生化」を図るために行った実践と，学生の自由記述アンケートの結果を中心に考察した結果を報告した．最終アンケートの自由記述には「高校の時の体育とは全然違うことに驚いた」「スポーツで PC を使った授業があるのにはびっくりした」という趣旨の意見が散見された．単位取得後の追跡調査では「面倒くさいことが多かったけど，2年生になって役立つことが多かった」「ほかの人より知識が少しあることに優越感を感じた」など，役に立っているという意見が散見された．このことから，実践は概ね仮説通り進んだと推察される．しかし，最後まで「人任せ」「他人頼み」な履修生も一定数存在する．このような履修生を「やる気がないから」で済まらず，「学生化」するためのさまざまな「しかけ」を考え，実践することが課題の一つである．また，本稿は自由記述アンケートの結果を中心に報告したが，リッカード形式で行ったアンケートの結果のまとめと報告も行っていきたい．

現在，多くの大学においてスポーツ授業は「レクリエーション」「複数種目のオムニバス」形式で開講される傾向にある．現実的に本学でも「半期，複数種目」への傾向は懸念されている．しかし，本稿で報告した実践は，通年 1 種目であるからこそできる内容であると言え，「半期，複数種目」では高等教育としての学びは難しいと推察される．アンケート結果では「スポーツ実技は，高校との学習プロセスの違いを理解しやすい科目」「様々な学習手法をスポーツ実技で経験することは有用である」ことが示唆されたが，さらに研鑽を重ね，「生徒の学生化」に寄与したい．

#### 注釈

- 1) 現在ではカリキュラムの都合上、半期開講となっている学部もあるが、「1種目」を学ぶ姿勢は変わっていない。
- 2) 少数ではあるが「LINEに生活を乱されるのが嫌」「LINE情報を他者に知られたくない」という意見があったため、採用を見送った。
- 3) Googleが提供するクラウドサービスである。当該履修生の間でのみ共有をし、必要であればスマートフォンからでも閲覧ができる。
- 4) Googleが提供するGoogle Appsの一つで、MicrosoftのPowerPointと同様のアプリである。
- 5) iPadアプリの「Coach's eye」を活用した。

#### 参考文献

- 出原泰明 (1990) 「大学生にふさわしい体育実践とは何か」, 『東海保健体育科学』第12号, 東海体育学会, pp.41-45
- 佐藤 進, 東木美憲, 高畑俊成, 青木 隆, 村田俊也, 鈴木貴士, 川尻達也 (2013) 「大学初年次における健康教育の取り組み」, 金沢工業大学, 『KIT progress : 工学教育研究』20, pp.7-16
- 武内 清 (2010) 「現代青少年の安定志向」, 『教育と医学』2010年1月号, p.54
- 武内 清 (2014) 『学生文化・生徒文化の社会学』, ハーベスト社, pp.53-54
- 村山光義・村松 憲・佐々木玲子・清水静代・野口和行 (2007) 「動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果 - フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例 - 」, 『慶應義塾大学体育研究所紀要』46 (1), pp.1-15

#### 謝辞

本稿執筆にあたり、本学スポーツ科学部スポーツ科学科教授 吉田文久先生が、東海体育学会第63回大会シンポジウム (2015年10月24日 於: 愛知県立大学) において発表された「日本福祉大学における『スポーツ実技』の実践 - 27年間続けてきた『通年1種目』の取り組み - 」での発表内容を参考にした。また、その他多くの資料をご提供いただいた。ここに深謝の意を表す。